

報告② ケニア訪問記

【出張メンバー】

谷口奈保子：ぱれっとインターナショナル・ジャパン (PIJ) 代表

黒澤友貴：いこっとサポートの会代表

3月1日からぱれっとインターナショナル・ジャパン (PIJ) の活動として谷口代表とケニアのモヨ・チルドレン・センター (以下MCC) を訪れてきました。MCCはケニアのティカ地域で貧しい子ども達の支援を行なうNGOです。MCCの子ども達と生活を共にしながら、代表の松下さんの現地に根を張ってつくる活動そのものから学ぶことの多い9日間でした。

●初日からのハプニング

日本から約20時間かけてケニアへ。ジャモ・ケニヤッタ国際空港到着後の荷物検査で、ダンボール箱3箱の寄付として持ってきたものにも税金がかかるとのこと。先回入国した谷口は何も言われなかったのにと困惑しながら、結果的に税金として約100ドルを払うことになりました。その後、寄付のTシャツ・スニーカーは無事に子ども達に渡すことができ、その時の笑顔は今でも忘れられません。

●スタッフと子ども達の関係性についての学び

2日目は朝からMCCを訪問しました。MCCに到着後お互いに自己紹介をし、スタッフのブライアンにMCCの中を案内してもらいました。彼は、ソーシャルワーカーと教育という2つの学位を取得しており、子ども一人ひとりにあった支援を行なうために、今はMCCで働きながらカウンセラーの資格を取得するための勉強をしています。MCC内のスタッフと子ども達のコミュニケーションには、彼らがストリートに戻らないように囲い込むという雰囲気は全くありません。特別なニーズがある子ども達だからといって過剰なサポートをするのではなく、その主体性を引き出し、自立を促す姿勢が感じることができました。この「自立」というキーワードは、MCCとぱれっとに共通するキーワードだと感じました。

●新プロジェクトの見学

3日目は、MCCの新プロジェクトである「有機農法を通じたストリートチルドレンのリハビリテーションセンター」を見学させてもらいました。ティカの中心にあるチルドレンセンターから25kmほど離れたマゴゴニという地域にあります。このリハビリテーションセンターの目的は、ストリートチルドレンや知的に障がいのある子どもが有機農法の仕事と、センターを中心としたコミュニティ内の生活を通じて、社会復帰に繋げることです。ストリートからの子ども達6名が宿泊できる施設となっており、サマースクールなどで近所の方々や学校がキャンプ体験として活用することも考えられているようです。しかし施設をつくるプロセスでは、建設が4回もやり直しになる、スケジュール通りに進まないなどNGO活動特有の難しさがあったようです。野心と寛容さの両方がないとケニアで大規模なプロジェクトを進めることは難しそうです。新プロジェクトの話で興味深かったのは地域連携についてです。プロジェクトは、地域の民生委員や町内会機能をもつ団体と連携して進めているようです。MCCの地域に根を張り、地域と繋がりながら活動をつくるという考え方は、ぱれっとが恵比寿という地域に根ざして活動してきたプロセスと共通しています。

●スラムの見学

その日の午後に訪れたキャンドウトウスラムでも地域との繋がりがあからこそできる活動があることを実感しました。スラムには45,000人の人達が暮らしているティカ地域最大のスラム街であり、経済的に貧しい家庭、何かしらの理由で田舎から出てきた家庭、夜逃げしてきた人などが集まっています。スラムを歩く中にも、すれ違う人々は松下さんに「テルミ！」と声をかけ、松下さんは立ち止まって最近の様子を丁寧に聞いていました。このような関係性が築けるのも、松下さんが

現地に暮らし、MCCが行なう活動の積み重ねがあってこそ成り立つものです。一方的な支援ではうまくいくはずなく、有効的な支援をするためには「人間関係づくり」が土台には絶対必要であるということ、松下さんの振る舞いから学びました。

●スタッフ向けワークショップ

今回の訪問で一番大きなイベントだったのはスタッフ向けワークショップです。2年前に谷口が訪れた際もスタッフ向けの研修を行ない、スタッフも楽しみにしていたようです。今回は黒澤も英語でのワークショップにチャレンジする機会を頂きました。

●ネットワーク構築について

現地を見学させて頂く中で、ストリートチルドレンが社会復帰するプロセス全てをMCCだけで完結することは難しいと感じました。そのため、MCCが、行政、教育機関、専門家、保護者とどのようにネットワークをつくり、複雑な課題にアプローチしていくのかを掘り下げることを目的にワークショップのテーマを定めました。事前に自分の意見と質問内容を模造紙にまとめ、共通認識を確認しながら進めました。経済発展が進むケニアですが、助成金制度や行政主導でつくる施設はなく、福祉制度は整いきっていないことを理解できました。MCCのスタッフは、自分たちの役割について明確な考えをもっており、今後どのようにMCCから行政や教育機関に働きかけ、多様なステークホルダーと共に理想とする社会をつくっていくかが楽しみだと感じました。

●谷口テーマ:性教育について

谷口ワークショップのテーマは「性教育」です。MCCに通う1人の子どもが、性的な問題を起こして家を出てきており、MCC内や学校でも同じように問題を起こしている、その子どもは、知的障がいがあり、言語表現が得意ではなく、特別支援学校(ケニアではSpecial school)に通っているとのこと。この個

別ケースに対して、スタッフ同士の話し合いだけでは行き詰まっているため、谷口がワークショップを行なうことになりました。おかし屋ぱれっとで実際に行った性教育の事例や、谷口がヨーロッパを訪れた際に学んだ事例などを紹介しながら、スタッフは個別ケースに対してどのように対応できるのかロールプレイを通して議論が行なわれました。

スタッフ同士では話し合いにくい、また行き詰まりやすいテーマに対して、谷口が他国の事例や、スタッフ自身の経験を引き出した上での問いを投げかけることで、組織内の共通認識を醸成し、性教育という難しいテーマの議論は次のステップに繋がったと感じました。

●まとめ

学生時代にスリランカ Palette を訪れた際に感じた、国を超えてもぱれっとが大切にする「すべての人達が当たり前暮らしせる社会の実現」を伝え、その理念に共感する人が集まり、活動がつけられていることに感動したことを思い出しました。今回、ケニアのMCCを訪れて強く感じたのはPIJの活動の意義についてです。ぱれっとが日本、スリランカで行なってきたことは、これから福祉制度をゼロからつくっていくケニア(その他の発展途上国)にとって貢献できる可能性は大きいと肌で感じる事ができました。そして、ぱれっとが大切にする「地域の中における人と人とのつながり」はどの国でどんな制度をつくる上でも土台となるはず。また、松下さんが子ども達、スタッフ、現地のステークホルダーと人間関係を丁寧に築きながらMCCの活動をつくっている姿から、ぱれっとがこれから何を社会に対して発信していくべきなのかのヒントを頂きました。まずは、自分自身が今回の学びを、いこっとの事業に活かしていきます。(いこっサポートの会代表 黒澤友貴)